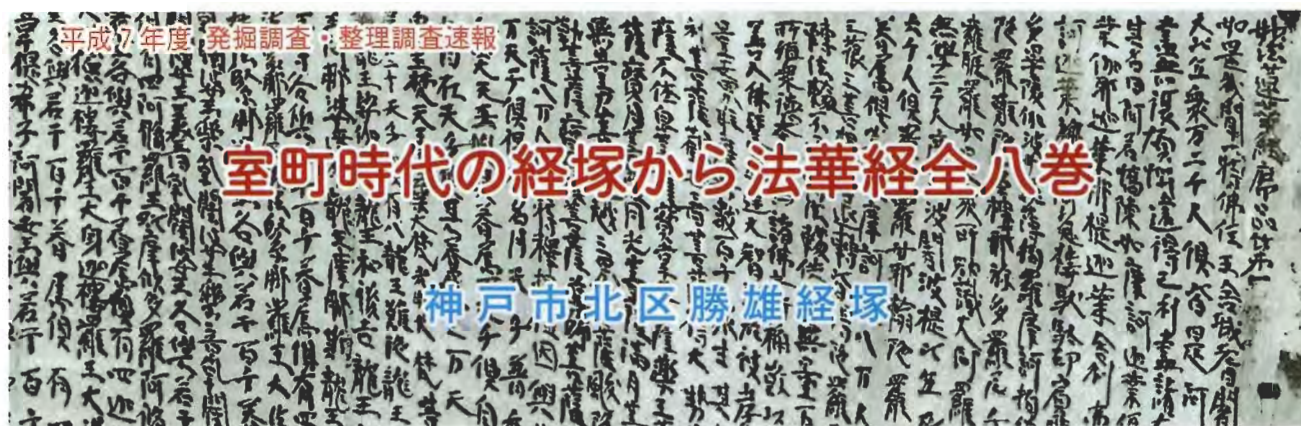


# ひょうごの遺跡



平成7年度の発掘調査で特筆すべきことは、震災復興関連調査が本格化したことと、装飾付須恵器（小野市勝手野6号墳）などの出土があります。装飾付須恵器については前号で報告しましたので、今回は宮内堀脇遺跡ほかの発掘調査と震災復興関連発掘調査の状況について、お知らせすることにします。

また、整理調査を進めるなかで、室町時代の勝雄経塚の経筒（紙に書いた經典を保護するための筒形容器）から法華経全八巻が見つかりました。経巻の残存状態が非常に良く、八巻ともほぼ完全な形で発見したのは全国でも初めてのことで、まずこの経塚をご紹介します。経塚とは、經典を書き写して埋納した場所のことを言い、仏教でいう末法の世が到来するという思想が広まった平安時代後期（11世紀）以降に多く造られます。ついで、鎌倉時代になると追善供養の性格が強くなり、室町時代には廻国納経の一手段に用いられました。

なお、銅製の経筒は保存処理作業の結果、表面に銘文が刻まれていたこと、さらに鍍金が施されていることが判明し、金色に輝く往時の姿に復元することが出来ました。



外容器と保存処理された経筒



# 勝雄経塚 (神戸市北区淡河町勝雄)



出土地遠景

経筒出土状況



3

経巻残存状況



4

経巻の取り出し



5

6

経筒保存処理前・処理後

県下の六十六部聖による経塚地名表

No.	名称	所在地	経筒
1	勝雄	神戸市北区淡河町	銅製円筒形
2	狐塚	神戸市垂水区名谷	銅製円筒形
3	吉尾	神戸市北区八多町	銅製円筒形
4	一色	加古川市平岡町	鉄製六角宝幢式
5	一本松	三原郡三原町榎列	鉄製六角宝幢式

## 用語解説

### ※六十六部聖と廻国納経

法華経を六十六部書写し、これを六十六箇国に一部ずつ納めて歩くこと、そしてこの修行者をいう。

勝雄経塚は、神戸市と三木市の市境にあたる丘陵尾根上の小高く盛り上がった地点（標高176m）に立地しています（写真1）。

この経塚は、地表面から深さ約20cmの素掘りの穴に、木製の蓋をした備前焼の壺が置かれていました。その中に銅製の経筒が納められ、外容器と経筒の隙間には雨水がたまっていました（写真2）。

発見後、当事務所に持ち帰り経筒の蓋を開けると、直径4.7cm、高さ9.4cmの筒身に紙本経八巻がぎっしりと詰まっていた（写真3）。

経筒内に納められた経巻は、そのまま放置すると腐食するため、すぐに取り出し、保存処理の作業を行いました。経巻の残存状態が極めて良かったので、破れることなく容易に処理できました（写真4）。

紙の材質はコウゾです。幅約9cm、長さ140～196cmで、平均して六紙ほどつなぎ合わせています。経文は上下1cmほどの余白をおいて、1行17字で写経され、文字は縦3mm横2mmの大変細かい字で書かれています。一字一字の墨の色は、460年前に書かれたものとは思えないほど鮮やかなのです（表紙写真）。

また、経巻の修復作業と並行して、経筒の保存処理も行っています。この筒が見つかった時、その表面は泥と錆で覆われていましたが、錆落とし作業の結果、表面の銘文の存在が明らかになった訳です（写真5・6）。

## 銘文



奉納  
大乘妙典六十六部  
十羅刹女  
播州住  
良円

三十番神  
享禄三年  
吉日

今日

良円

この銘文から経筒は、播州の住人良円が六十六部聖の廻国納経<sup>ろくしゅうく</sup>のため、享禄三年（1530）に法華経を納めたことが判明しました。

六十六部聖の廻国納経による経筒は、現在まで全国で約300点発見されていますが、経巻は紙のために腐食しやすいことから、残存例は紙片をあわせても30例ほどです。

そうしたなかで、今回発見した経巻は、ほぼ完全に残っており、奉納時の状態をとどめる唯一のものとして、経塚の性格と当時の人々の思想を知るうえで、大変貴重な資料なのです。

併せて、経巻の劣化を防ぐための保護と管理も、わたしたちの大切な任務となっています。



## 宮内堀脇遺跡 (出石郡出石町宮内)

但馬・出石町宮内には、<sup>あめのひぼこ</sup>天日槍神話で著名な出石神社とともに、山名氏宗家の居城此隅山城跡があります。

山名氏は、11箇国を領有し『六分の一殿』と呼ばれた山名氏清、応仁の乱の西軍大将であった山名宗全で知られるように、室町幕府の有力守護大名でした。この城は14世紀後半に築城されたと言われ、<sup>えい</sup>永禄12年(1569)8月織田信長軍の但馬侵攻によって落城しています。

当事務所では、平成6年度から県道改良工事に伴って宮内地区の発掘調査を実施してきました。そして、平成7年度に初めて此隅山城武家屋敷跡の一部を発見したのです。調査は今後も継続予定ですが、遺構と遺物の残存状況が極めて良く、全国的にも注目されるものなので、その成果をお知らせします。

調査地点は、此隅山城の西南の山裾から一段下がった水田部分、入佐川を挟んで御屋敷と呼ばれる居館推定地の西側に位置しています。調査面積は約2100㎡でした。

武家屋敷は、整地と溝によって区画された建物跡、堀、土塁で構成されています(写真7)。



調査区全景 空中撮影写真

これらの遺構は、水田の約1m下より見つかりました。厚い江戸時代の洪水砂を取り除くと、整地土と建物の礎石が姿を現します。

整地は、湿地を黄色の山土によって埋め立てたもので、地盤沈下や火災による建て替えに伴って地上げされ、厚いところでは約1.2mにも及んでいました。土層堆積の断面を見ると、整地層の間に火災層や土間に貼った粘土が挟まれ、さながら神戸銘菓のバームクーヘンです(写真8)。

建物には玄武岩を使用する礎石建物と、地面に直に柱を建てる掘立柱建物のほか、根太建物(地面に丸太を並べその上に床板を張る)も見つかりました。



積み重なった整地層断面

いずれの建物も屋根は瓦葺きではなく、板で葺かれていたようです。

その他、建物では地面に小さな杭を打ち込んだ間仕切り跡が確認されています。また、幾つかの建物では、何度も繰り返された整地によって、柱や壁・床を支えた根太、粘土を貼った土間、<sup>いろり</sup>囲炉裏などが埋まったまま発見されています(写真9)。



建物内の囲炉裏跡

この建物群の外側には二重の堀が巡らされ、土塁を造って守りを固めています。規模の大きな内側の堀は幅約7m、深さ約1.5mもありました。また、土塁の高さは約1.5m、この上には栗や竹などの樹木が植えられていました。

これらの遺構の年代は、15世紀後半から16世紀末にかけてのようです。



炭化した畳の出土状況



武家屋敷跡から出土した遺物には、陶磁器、金属製品、木製品など種々雑多なものが見られます。

まず陶磁器では、越前焼の<sup>すう</sup>描鉢に<sup>かめ</sup>甕、瀬戸焼や美濃焼、備前焼の陶器、さらに朝鮮製と中国製の陶磁器があり、物資交流の活発さが窺えます。

また、鍍金を施した<sup>こう</sup>香道具、釘と座金具、鉄砲玉に刀と小柄、<sup>こづか</sup>錐と<sup>きり</sup>鋏に毛抜き、包丁に火箸、中国銭と言った金属製品、漆碗に<sup>おしき</sup>折敷と箸、羽子板に独楽、<sup>にんぎょう</sup>絵馬と人形、お茶の銘柄を当てあった<sup>さうちふだ</sup>蘭茶札などの木製品、<sup>すごろく</sup>畳（写真10）、骨で作った双六の駒など様々なものがあり、当時の武士の生活が偲べれます。

これら出土遺物の中でも特筆されるのが、出土遺構の年代を特定できる<sup>きねんめいもっかん</sup>紀年銘木簡（年号の書かれた木の札）です（写真11）。全長約16cmで、礎石建物の存在する遺構面上を覆う焼土と炭化物の混じった土層中から発見しました。用途は荷札と考えられ、乃木出羽守が受取人である可能性が高いものです。なお、乃木氏の名前は、惣持寺（宮内にある寺院）本尊造立奉加帳（天文3年-1535）に乃木日向守、乃木丹後守が見られ、出羽守も当地の武士と考えられます。

永禄12年（1569）8月24日は、前記した織田軍の但馬侵攻の直後にあたり、木簡の出土した遺構面が此隅山城陥落時の生活面と考えてもよさそうです。

釈文

（裏）（表）

永	乃
禄	木
拾	出
貳	羽
年	守
八	□
月	□
廿	□
四	一
日	つ
以	く
上	り
三	□
つ	□
	□
	二
	つ



年号を記した木簡

今回の調査は、これまで不明であった此隅山城の城下町の様子について手掛かりが得られたことに意義があり、武家屋敷に巡らされた堀と土塁、幾度となく起こった火災の跡、出土した刀と鉄砲玉に戦国時代の厳しい世相を垣間見ることができるのです。

### わたしたちの仕事 春の分布調査

わたしたちの1年は、春の分布調査から始まります。

分布調査は、野山を歩いて遺跡を探索する仕事です。この季節は野山の草木がまだ繁ってなく、田畑が耕され土器が見つけやすくなっているので、遺跡を探し歩くには一番良い季節なのです。その様子を知っていただくために、ある職員の調査日誌を紹介しましょう。

4月23日（火） 神戸から約3時間、日高町へ向かう。まず神鍋高原のスキー場のそばを歩く。残雪を踏みしめ、砂防ダムの工事予定地を調査する。そのあと山を下り、高原最奥部で国道のバイパス予定地約1kmを歩く。どちらも遺跡はない。神鍋の食堂でカツカレーを食べ、山道を越えて竹野町へ向かう。沿道のサクラが満開。山間部の砂防ダムの予定地を調査のあと、竹野のまち中へ。県道の拡幅予定地を300mほど歩く。天気良く、喉が渇く。午後3時半、今日の最終地点、城崎町に到着。ここで豊岡市と但東町をまわった班と合流し、県道バイパスの予

定地を約1km歩く。古墳を発見。本日初めて出会った遺跡である。やったね。午後6時ごろ、宿泊地の浜坂着。本日の車の走行距離240km、歩いた距離約7km。

4月24日（水） 午前8時、浜坂町から香住町へ向かう。別の班は温泉町へ行く。国道バイパス予定地、約6kmの調査にかかる。香住市街地南はずれの水田で土器を拾う。その後、山に分け入る。繁みがひどく調査は難航。やっとの思いで平地へ出る。午前中に半分ほど終わり、佐津駅前の食堂でカレーうどんとご飯の昼食をとる。午後から温泉町と浜坂町をまわった班と合流し、残りの範囲を歩く。山裾で古墳らしきものを確認。午後4時調査終了、帰路につき、午後7時すぎ、神戸着。2日間の車の走行距離480km、歩いた距離約12km。兵庫県の実感する。

わたしたちは、春先には、このような分布調査を県内各地で行っています。発掘調査に至るまでには、こうした遺跡が存在するかないかという、基本的なデータを集める仕事も必要なのです。



## 平成7年度調査遺跡ダイジェスト 1

(所在地などは、最終ページの一覧表をご覧ください。)

かみわき  
上脇遺跡①

明石川支流の伊川の右岸にある弥生時代から鎌倉時代の集落跡です。古墳時代の遺構もたくさん見つかりました。写真は古墳時代後期（約1400年前）の竪穴住居跡で、白線の丸印のところが柱の位置です。

ひやま  
火山古墳群③

古墳時代中期（約1500年前）の古墳群です。6基の古墳（木棺直葬墳）を調査しました。写真は4号墳の調査状況です。3つの棺があり、中から刀・剣・工具などたくさんの鉄製品が出土しました。

しおつぽ  
塩壺遺跡④

明石海峡を望む高台にある弥生時代後期（約1700年前）の集落跡です。写真は遺跡の中央で見つかった楠木断層です。弥生時代以降に起こった地震で竪穴住居の床が約20cmほどずれています。

なげまつ  
投松6号窯跡⑦

平安時代前期（約1100年前）の窯の内部を土層観察用の畦を残しながら掘っている写真です。黒く見えるところを灰原といい、窯内の灰を掻き出したり、焼くときに失敗したものを捨てていたようです。

みはら  
三原遺跡⑩

地面をていねいに削り、遺構を見つけている写真です。調査では古墳時代後期（約1400年前）の竪穴住居跡を16棟見つけました。竈を持つものが多く、特殊な形態のものも発見しています。

しょうかくさん  
状覚山古墳群⑪

飛鳥時代（1350年前）に造られた、丘陵の尾根上に立地する古墳群です。今回の調査で6基が見つかりました。埋葬主体部は横穴式石室で、中には組合せ式の石棺が置かれていました。



## 平成7年度調査遺跡ダイジェスト2

(所在地などは、最終ページの一覧表をご覧ください。)

いちのこう  
市之郷遺跡⑫



瓦がまとめて捨てられている状況の写真です。

これらの瓦は、軒丸瓦の文様により飛鳥時代から奈良時代（約1300年前）と推定され、市之郷廃寺に関連するものとわかりました。

サルガク遺跡⑬



柱穴を掃除し、その周囲に白線を書き入れている写真です。柱穴を組み合せると掘立柱建物が復元でき、奈良時代から鎌倉時代（約1250～700年前）の集落跡であることがわかりました。

はったんだ  
八反田遺跡⑮



奈良時代（約1250年前）の掘立柱建物跡を2棟発見しました。2間×5間の大きさの建物で、重なっていることから、年代差があることがわかります。昔の役所（佐用郡衛<sup>くんか</sup>）の一部と考えられそうです。

ひだかあげいし  
日高上石遺跡⑮



奈良時代末から平安時代（約1200年前）にかけての建物跡が見つかりました。また、その近くから写真にある皿が24枚まとめて出土し、内12枚の裏側には「猪主」という文字が書かれていました。

くさかべ  
日下部遺跡⑰



古墳時代の終わり頃（約1400年前）の住居跡が3棟見つかりました。いずれも平面が四角形で、造り付けの竈を持っています。竈の横には貯蔵用の穴も見つかっています。

あくらみなみ  
安倉南遺跡⑳



平安時代から室町時代（約900～500年前）にかけての屋敷跡が見つかっています。井戸も3箇所で見つかり、写真のものは底の部分で、石を積み上げて造られています。



## 復興調査この一年

平成7年1月17日に発生した阪神・淡路大震災は、多くの尊い人命を奪うとともに、私たちのまちに未曾有の被害をもたらしました。震災後1年4か月を経て、復興工事も各所で本格化し始めています。

ここでは、復興事業に伴って行った発掘調査の一年余の状況を振り返ってみたいと思います。

埋蔵文化財包蔵地での家屋の倒壊や焼失などの被災面積は、震災直後の悉皆調査<sup>しっかいちょうさ</sup>では阪神間を中心に253.6haにのびました。被災面積すべてを調査する必要はありませんが、住宅の再建や再開発・土地区画整理事業に伴う発掘調査量を考えると、困惑せざるを得ない面積でしたし、埋蔵文化財の調査が復興のスピードについていけるかという不安もいただきました。

こうした事態のなかで、文化庁からは、ライフラインの復旧や仮設住宅の建設など当面の緊急を要する工事については、文化財保護の届出を要しないという通知がなされ、さらに3月末には、復旧・復興事業に伴う埋蔵文化財の取扱いに関する基本方針が示されました。その趣旨は、従来のデータを有効に使いながら調査を効率化しようとしたもので、記録保存のための発掘調査は、遺構の損壊する部分に限るなどの措置がとられました。

兵庫県教育委員会は、この基本方針を受けて、具体的な調査の実施について検討を行い、4月末に「適用要領」を定め、県下全市郡町教育委員会に通知しました。その後、関係市町の実務担当者<sup>じつむたんとうしや</sup>と協議を重ねながら、被災地の遺跡の具体的な取扱いについて不均衡が生じないように、慎重かつ可能な限り迅速に調査に入れるよう努めました。

このようにして復興関連調査が少しずつ具体化していくなかで、埋蔵文化財は復興を阻害するものではなく、自分たちの財産・祖先の遺産として愛情を持って扱って欲しいという世論が湧き出るようになりました。

6月1日、全国から25名の専門職員の方々が支援のため本県に派遣されました。しかし、復興の出足は鈍く、最初の調査は7月に入ってからのものでした。

一方、この頃から兵庫県や神戸市をはじめとする被災各市町では、それぞれ震災復興計画を打ち出しましたので、発掘調査も復興計画に応じて対応することに努め、特に直接的な被災地復興事業と住宅関

連事業は優先的に調査することとなりました。

そして、県教育委員会と被災各市町教育委員会では「支援に関する協定書」を締結し、復興事業の発掘調査にあっては本県は従来の役割分担を越えて、市町において対応できない調査に対する支援を行うことになりました。

このことによって、様々な調査形態が必要となり、派遣を受けた県にとっても支援職員の皆さんにとっても、初めてのことが多々あったように思われます。特に、市町が事業主体となった支援事業では、小規模の複数遺跡を同時期に調査せざるを得なくなり、支援職員の皆さんだけで調査をすることが多くありました。当初はやや混乱しましたが、各発掘調査現場とも地元の皆さんからの暖かいご声援をいただき、許された期間のなかで調査を無事に終えることができました。

10月からは支援職員の方が10名増員され、総員で35名となりました。調査が進むにつれ、単に調査するだけでなく、出土した資料をどのように公開・公表していくのかという問題も生じてきたことも事実です。この点については、なお検討し、関係市町と協議を重ねていかななくてはなりません。

ともあれ、平成7年度に市町支援として行った調査は、大規模な土地区画整理から個人住宅建設に伴うものまであって、その調査の期間や面積に差がありますが、合計35遺跡を数えました。



復興調査の現場（安倉南遺跡）

以上、昨年度の復興調査を大ざっぱに振り返ってみました。調査に携わっていただいた支援職員をはじめ派遣についてご配慮いただいた各府県の関係者、緊急を要する発掘調査においてご協力下さった地域の皆さんに改めて感謝申し上げます。

今年度も、4月1日から49名の支援職員の応援を得ております。昨年度以上に発掘調査量も増えるでしょうが、復興事業の円滑な推進と埋蔵文化財保護について努力していきたいと思っています。



## 平成7年度に行った主な発掘調査

No.	遺跡名	所在地	遺跡の種類	事業名
①	上脇遺跡	神戸市西区伊川谷町	弥生時代～鎌倉時代の集落跡	神戸西バイパス建設
②	七日市遺跡	水上郡春日町野村	平安時代の集落跡	北近畿豊岡自動車道建設
③	火山古墳群	水上郡春日町平松	古墳時代中期の木棺直葬墳	
④	塩壺遺跡	津名郡淡路町岩屋	弥生時代の集落跡	国道28号線改良
⑤	芝崎遺跡	神戸市西区玉津町	弥生時代～中世の集落跡	国道175号線拡幅
⑥	入佐川遺跡	出石郡出石町宮内	古墳時代～室町時代の集落	小野川放水路事業
⑦	投松窯跡	加古川志方町大沢	平安時代の窯跡	山陽自動車道建設
⑧	勝手野古墳群	小野市黍田町	古墳時代後期の横穴式石室墳	
⑨	大年山遺跡	三木市別所町和田	古墳時代～奈良時代の集落跡	
⑩	三原遺跡	水上郡柏原町三原	古墳時代～中世の集落跡	丹波の森公苑建設
⑪	状覚山古墳群	加西市網引町状覚山	飛鳥時代の横穴式石室墳	加西網引産業団地建設
⑫	市之郷遺跡	姫路市市之郷	弥生時代～中世の集落跡	JR山陽本線連続立体交差
⑬	サルガク遺跡	神崎郡市川町沢	奈良時代～鎌倉時代の集落跡	県道長谷市川線道路改良
⑭	宮内堀脇遺跡	出石郡出石町宮内	室町・戦国時代の武家屋敷跡	県道町分久美浜線道路改良
⑮	八反田遺跡	佐用郡佐用町佐用	奈良時代の官衙跡	佐用高校体育館建設
⑯	有鼻遺跡	三田市けやき台	弥生時代～中世の集落跡	㊦北摂地区新住宅市街地開発
⑰	貴船神社遺跡	津名郡北淡町野島	古墳時代～奈良時代の製塩跡	㊦県道福良岩屋線改良
⑱	日高上石遺跡	城崎郡日高町上石	奈良時代～中世の集落跡	㊦県営日高国府住宅建設
⑲	日下部遺跡	神戸市北区道場町	古墳時代から中世の集落跡	㊦道場・八多特定土地区画整理
⑳	安倉南遺跡	宝塚市安倉南一丁目	平安時代～室町時代の集落跡	㊦県営宝塚安倉南住宅建設

注、㊦は震災復興事業

## 平成8年度の支援職員の皆さん (敬称略)

都府県市名	氏名	都府県市名	氏名	都府県市名	氏名
青森県	工藤 忍	三重県	大川 勝宏	福岡県	吉田 東明
岩手県	鎌田 勉	滋賀県	兼康 保明	佐賀県	小松 譲
福島県	小野田義和		大道 和人	熊本県	宮崎 敬士
宮城県	山田 晃弘	京都府	福島 孝行	長崎県	川口 洋平
茨城県	深谷 憲二		岸岡 貴英	宮崎県	和田 理啓
群馬県	矢口 裕之		石崎 善久	鹿児島県	東 和幸
千葉県	神野 信		藤井 整	仙台市	渡部 紀
	半澤 幹雄	大阪府	今村 道雄	千葉市	白根 義久
東京都	伊藤 敏行		岡本 敏行	広島市	石田 彰紀
神奈川県	中田 英		瀬田佳男		
埼玉県	岩田 明広		横田 明		
	中山 浩彦	奈良県	大西 貴夫		
山梨県	小林 公治	和歌山県	辻林 浩		
長野県	藤原 直人		富加見泰彦		
岐阜県	小淵 忠司	鳥取県	家塚 英詞		
	三輪 晃三	島根県	目次 謙一		
静岡県	河合 修	岡山県	弘田 和司		
	菊池 吉修	広島県	青山 透		
愛知県	佐藤 公保	山口県	谷口 哲一		
福井県	鈴木 篤英	香川県	植松 邦浩		



## 編集後記

◇ひょうごの遺跡も21号となりました。創刊号以来、久しぶりの編集担当です。

◇震災復興元年、本年度も49名の支援の方々をお迎えしました。今、地域の歴史を見直すためにも、考古学が頑張らねばならないときです。よろしくお願いします。(S・O)